

---

**駄文しか書けない人が気晴らしに書いてみた。**

冬華。

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

駄文しか書けない人が気晴らしに書いてみた。

### 【Nコード】

N9880R

### 【作者名】

冬華。

### 【あらすじ】

友達の作品をパク…リスペクトしてみた？作品です。

非常に残念ながら？作者は末期です…

あ、あとファンタジー？です。

(前書き)

1 発ネタが為に書いた。後悔も反省もしてない。

ぽぽぽぽくんも混ぜたかったけどそんなキャラじゃなかったorz

少しでも暇つぶしになれば光栄です。



警棒に銃、魔法の類は多分ないだろうけど魔具は数個所持してやる…こいつ捕まえる気満々じゃねーか…

「旅のお方でしょうか、一応確認致しますね。この国の入国審査証かギルドの認定証を拝見出来ますか？」

「ギルドのがこつちです。審査もそれで通つたんで審査証は貰いませんでした。」

「ふむふむ…では…最後の確認で…」

魔具の準備をしている…？ 妙な動きをしたら捕まえるぞっというアピールか… おおこわいこわい。

「この国では奴隷制度、又はそれに準じる獣人差別は罪となります。他国からの入国者でも例外はないことはご存知ですよね？」

「それで…俺が奴隷、又はそれに準じる獣人を飼っている？」

「…その疑いがあるとして、本人達を本部に連行するようにとの命令です。」

「拒否するなら？」

あ… 今ピクツって動いた… 結構やれる人だなこの人…

「私の裁量で死なない程度にお連れしると…」

今手持ちに少ししかないから無理かな… 全力なら話は別だけど、そんな頑張りたくねえ！

「了解、了解。何もしませんよつと。武器もそっちに預けた方が良さげですか？ あと、あの子は寝かせておきたいんですけど…」

「構いませんよ。武器は…一応、本部の方でチェックされるのでどちらでも良いです。では部下をここに待機させて私達は本部に向かいますようか。」

「ほいほい。」

数時間、警邏本部での取調べ。…無限ループって怖いな… 無限すぎて飽きてきたわ…

Q1・奴隷を所持していることを認める

A1・認めない

Q2・なら近隣の人が聞いた悲鳴を説明しろ

A2・治療

Q3・治療であんなに悲鳴を出すわけがない。実は奴隷をいたぶっていたのだろう

A3・いいえ（…こいつ頭湧いてんのか…？）

以下無限ループ

結局、朝起きて迎えに来たソヨルが弁明するまで無限ループだよ  
… 精神にくるな… 冤罪はこうして生まれるんだね！

「ご迷惑をおかけしました！ アマネも浸ってないでお礼言つてよ

」

「そうだな… うちの嫁が皆さんにご迷惑をかけました。」

「よよよよよめって誰のことよ。というか今回は全部あんたの責任でしょ！」

「またまた〜分かってる癖に〜。赤くなっちゃって可愛いぞ〜」

「それより全部あんたの責任でしょ！」

「いいや分かってないなソヨちゃん。ことの発端はソヨちゃんが軟膏を嫌がったところから始まったんだ。だからソヨちゃんのせい！」

」

「子供扱いすんな！ もっともとをただ糾せばアマネが仕留めそこなつたのが私のところまで来たのが原因でしょ！ そこまで戻せばあんなのせいじゃない！」

「…水掛け論になるからここまでで止めよう…」

宿に戻り、荷物をまとめ、旅路の準備を済ませる。保存食は多めに、次の町まではだいたい1週間ほどだけれど何が起こるか分からないから！

最後に宿の女将さんに挨拶に行ったがちょっと余所余所しい態度で悲しくなった…

街が見えなくなつて愚痴を吐いたつて許されると思つんだ。もう2日間もその話題に触れなかつたし。

「つたく酷いよな」。俺の経歴全部洗い出されたし。どんだけ俺のこと犯罪者にしたいんだつーの！」

「・・・」

「ん…もしかしてまだ怒つてらっしやる？　おい。ソヨルさん？　ソヨル…　反応がないただの屍の様だ…」

「・・・」

「突っ込みすらなしとか…　ソヨ、一体どれに怒つてるんだ！。荷物持たせてることか？　軟膏臭いことか？　俺が捕まったことか？　嫌がったのに嬉々としてやったことか？」

「言つてたらどどん湧いてきた…　あれ？　俺怒られることしかしてない…？」

「ソヨ！　助けて、襲われてる。こつち向いて！」

「アマネ大丈夫なの！？」

焦った表情で後ろを振り返ってくれる。ああ…やっぱりこの子は俺のこと心配してくれてるんだ…流石俺の嫁！　もちろん襲われてなどいない。振り向かせたいがゆえの嘘である。

「…もう知らない！」

「そんなふくれっ面しないでよソヨル！。　ちょ…まっ…速くなつてる速くなつてるから！　荷物あるからそんな速度無理だから！」

「

徐々に差が開き始めた頃、不意に足に絡まるものを感じた。

「ただの植物如きに俺のソヨルへの想いが止められるものかあー！」

「

ガン無視で突き進むこと決定。というかそうしないと差が付き過ぎて見失う。こんな森で見失うとか危なすぎるからね！

「真面目に見失うから待つてソヨル！　ツタ絡まってその速度は出

せないって。」

「アマネのばーりーか！」

最終手段として真摯に願ってみるが、通じず遂に姿が見えなくなつてしまった…

まあはぐれても良いように3日分の食料と寝床、火を起こすキットを携帯させているので大丈夫だとは思うが…

「はあ… お前のせいだぞ！ このツタめ！ 燃え尽きる！」

追いかける為に速攻で燃やしにかかるが…

「んな… レジスト?! なら詠唱… 出来ないじゃん！ ソヨル居ないから無理ぽ… 物理でちぎるしかないか…」

面倒だ… あれ?なんか引きづられてる? アレレー何か嫌な予感がするぞー?

「ワイパツクントゴタイメンダー」

ぱつくんみたいな形はしていない。言うならあのハエとか食べる植物の大きい版? 距離はまだ10メートル近くあるから平気そうだけど… レジスト習得してる食人植物とかどんな年齢だよと…

「えっと… ナイフで切れるかな? 切つれるかな切つれるかな遊んでる場合じゃないけどな…」

「あ、あれ? アマネー? ついてきてないのー?」

数分突き進んだ後、振り返っていつも居る人が居ない。

「…まあアマネが迷子になっても平気か。一応私だってキャンプキツト持つてるし、うん、大丈夫大丈夫。怖くない怖くない。」

アマネに教えてもらったことを思い出しながら行動に移す。

「天気が悪いときは屋根を張るか安全な洞窟を探せ… とりあえず今日は平気そうかな…。拠点を張る時はなるべく周りを見渡せるところ…。森だから周りに木がないところの方が良いかな…。火を絶やさず、寝ても良いけど寝入るな…。たしかキャンプキツトに火を

起こすのあったよね…。どんな時も生き抜け1日あれば見つけてみせる…。迷子があっちだし。」

拠点を決め、薪をくべたあたりで静かすぎて空しく感じている自分に気づく…が無視。

「……………バカ」

そして夜が明けようとしている時…

ガササツ！草むらを何かが駆ける音でウトウトしていた自分を起こす。

火は既に風前の灯火となっており、動物を威嚇する力を発揮していない。

その事を悟り重心を軽く下げて半身になり相手の出方を伺う。

前から来たら右手で払い左で沈める。後ろからなら肘をぶつけてそのまま回転して左足で刈る。

色々シュミレートしながら来る敵を待つ。

来た！正面からいきなり飛び掛りには来ない…警戒されてるか…

狼系の動物か… モンスターじゃなくて良かったって言いたいけどどつちにしろ荷が重いな…

絶対、大丈夫なんだから！

気合を入れるための咆哮

「よし、来いっ！」

「おっはようソヨル！。会いたかったよ。」

空気の読めない馬鹿登場。

「あのパツクン野郎こつちに打開の手が無いからって両手両足に巻きついてきてやられるかと思ったよ、まったく！ なんか太陽光無くなったら耐久落ちたからぶつちぎってやっといたけど…」

なんかソヨちゃんが俺のこと冷めた目で見てる…気がする。話題

を変えなくてわ！

「…その犬飼うの？ 名前どうするの？ 餌代とかもバカにならないでしょ、流石に犬の餌代は持てないよ？」

「…一応。襲われかけて、飼う予定はないから大丈夫。」

「そう… じゃあおっぱらっちゃって良いよね！」

「お願い出来る嬉しいな…」

「ソヨちゃんが喜ぶんなら頑張っちゃうぞ。 去れ犬っころ。」

いつもとは全然違う声色で犬っころに少し威圧を与える…

面白い位キャンキャン吠えて逃げていった…

「負け犬ほどよく吠えるって本当だったんだね… 大丈夫だった

？」

「…うん。大丈夫だったけど…今のでちょっと腰が抜けちゃったかも…」

「若いのに大変だね… 荷物はここにあるからとりあえず はい。首に腕回してー。」

「?? う、うん… ちょっと、待ってそれはダメ、ストップ、やめて。」

「ダメ。こうしてないとまたどこかに行っちゃうでしょ？ それに俺がしたかったし！ お姫様だっこなんて滅多に出来る経験じゃないからね。今なら特別サービスでキスマでならしてあげちゃうぞー。」

「…」

耳まで真っ赤にして顔を見せまいと俺に顔をなすりつけるソヨルが可愛すぎて俺が死にそうだ…

「なあ、なんでも言うこと聞くからさあ… 機嫌直してよ。」

「本当になんでも…？」

「お…おう！ 二言は無いぜ。」

「じゃあ… ずっと私の傍に居なさいよ…」

(後書き)

ん？ 前半の数行書きたかっただけだよ？たぶん  
話が膨らんじやったから書いちゃえてノリで5時間ほどの作品で  
す。

感想などなどは気軽にどうぞ

マナー違反かもしれませんが

のかたと色々意見交換してるのでネタが被っても大丈夫。許可は  
貰っています。

[http://mypage.syosetu.com/1194  
71/](http://mypage.syosetu.com/119471/)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9880r/>

---

駄文しか書けない人が気晴らしに書いてみた。

2011年3月28日03時40分発行